

## 巻頭言

私の出身学科は地球物理だが、そこで地球科学が地震学や気象学などに細分されていることを学んだ。それぞれの体系に感心する一方、相互の接点が希薄なことを残念に感じたものである。この当時まだ歴史の浅かった惑星科学は、分野の垣根を取り払い、地球を含めた惑星を総合的に理解しようとする姿勢が鮮明で、まぶしく感じられた。これが、私が研究分野として惑星科学を志望した一番の理由である。だが最近、いろいろな場面で惑星科学も細分化が進んでいることを実感することが多くなった。知識が増え、人が増えた科学分野が必然的にたどる途であることは否めない。とはいえ、惑星や太陽系の成り立ちを総合的に解明することが、この学問の中心テーマであり、また存在意義の核心でもある。研究者が少人数しかいない時代にはあまり気にせず済んだが、個別のテーマの追及と理解の総合体系の更新を密接にフィードバックさせることが、今後ますます重要になると思われる。そのための舞台装置の一つとして、本誌ならびに本会を活用頂きたい。

倉本 圭(第13期日本惑星科学会会長)